

私学の魂

日本工業大学駒場中学校・高等学校

日本初の飛行機が校内の実習工場で製作されたものづくり教育の伝統とDNAを受け継ぎながらも、来春、工業科を廃止して進学校への新たなスタートを切る新生・日駒の“三位一体(日駒トリニティ)教育”とは？

今年7月に東京都から「普通科専一校」の正式認可を受け、来春2021年からは高校に「文理未来コース」を新設。高校工業科を廃止して、本格的な進学校として新たなスタートを切る日本工業大学駒場中学校・高等学校。国内でも指折りの長い歴史と伝統を持つ工科大学～工業学校～工業高校の「ものづくり教育」のDNAを受け継ぎながらも、あえて中高とも普通科のみの学校として生まれ変わり、次の新たなステージに向かう同校の、今後の進化の方向性と、新たに掲げた「^{つよ}優しく心を育てる」重層的三位一体の教育「日駒トリニティ」の具体的な教育展開を、今回は学園理事で前々校長の大森和夫先生と、現校長の大塚勝之先生にお話を伺いました。同時に私学としての「不易」にあたる創立の理念や草創期の歴史を振り返り、それを現代にも受け継ぐ同校の教育の根幹についてのお話も聞かせていただきました。



学園理事の大森和夫先生



校長の大塚勝之先生

DATA

1

日本工業大学駒場中学校・高等学校

- 沿革 1907 (明治 40) 年 12月18日設立認可。校名、東京工科学校。校舎は小石川区水道端町。
1908 (明治 41) 年 2月開校。生徒数 70 名。季節に因み帽章は梅花を交錯する。
1911 (明治 44) 年 8月、校舎神田錦町 3 丁目 24 番地に移る。
1923 (大正 12) 年 9月、関東大震災により、校舎全焼。
1931 (昭和 6) 年 6月29日、5年制 (甲種) の東京工業学校を設置、校長に大木喜福就任。
1948 (昭和 23) 年 4月、目黒区駒場町 751 番地の現在地に校舎落成、神田より駒場に移転。5月、東京工業高校・東工学園中学校を設置。校長に大木喜福就任。
1967 (昭和 42) 年 日本工業大学を開学。学園創立 60 周年を迎える。
1987 (昭和 62) 年 ミニ SL 国際フェスティバル開催 (於 日本工業大学)。イギリス・フランス・ドイツ・スイス・オーストラリア各国の名機も参加。
1990 (平成 2) 年 4月、学校法人東工学園を学校法人日本工業大学と改称。東京工業高等学校校名を日本工業大学付属東京工業高等学校とし、東工学園中学校を日本工業大学付属中学校と改名。
2007 (平成 19) 年 6月、100 周年記念ホール竣工。創立 100 周年記念式典を行う。9月、ミニ鉄道フェスティバル開催 (於 日本工業大学)
2008 (平成 20) 年 日本工業大学付属中学校、日本工業大学付属東京工業高等学校を日本工業大学駒場中学校、日本工業大学駒場高等学校に改名。共学化。
2016 (平成 28) 年 創立 110 周年記念建設事業 (校舎大規模リニューアル工事) 着工。
2020 (令和 2) 年 7月、普通科専一校として東京都から正式認可。
2021 (令和 3) 年 高校に「文理未来コース」新設。工業科廃止へ。

校長 大塚 勝之

所在地 〒153-8508 東京都目黒区駒場 1 丁目 35-32
TEL : 03-3467-2130
<https://www.nit-komaba.ed.jp/j/index.php>

交通 京王井の頭線「駒場東大前駅」西口下車徒歩 3 分。東急田園都市線「池尻大橋駅」北口下車徒歩 15 分。

110 年前に日本で初めての飛行機が 学内の実習工場で作製されたという、 ものづくりの DNA がいまでも息づく

ライト兄弟が自作の飛行機で初めて空を飛んだ 7 年後の 1910 年、日本で初めての飛行機が、この学校の実習工場で作製されました。当時のモノクロ写真は毎年の『学校案内』に掲載され、いまでも埼玉県宮代町の日本工業大学の学内には、この飛行機の現寸大模型が展示されています。

これが、東京で 2 校目の工科大学として認可された伝統を持つ、現在の日本工業大学駒場中高にいまでも受け継がれる「モノづくり」の DNA を示す逸話です。

いま、時代は「STEAM 教育」を求め、それはグローバル教育と並んで、今後の新たな社会で必要とされる力を育てるための、学校教育の現場での喫緊の課題とされています。

「日本初の飛行機の実験という、ある種の偉業が、この学校で行われたことは、やはりいまでも私学としての校風や教育姿勢に色濃く影響を及ぼしていると思います」と、第 5 代校長で現在は学園理事を務める大森和夫先生は言います。

私学には創立の理念があり、それが現代まで、教育姿勢や DNA ともいえる文化遺伝子（ミーム）として受け継がれているとすれば、日本工業大学駒場中高の「三位一体の（日駒トリニティ）教育」は、まさにそれを具現化して進化させるものです。

「本校の教員はみな“熱い”ですよ。生徒一人ひとりに徹底して関わる。それは創立時からの工業教育で土台が築かれたものかもしれませんが。機械や道具を駆使したモノづくりには、一歩間違えると危険も伴います。だからこそ師弟同行というか、近くで生徒を見守る姿勢が不可欠だったのですね」と、現在（第 7 代）の校長を務める大塚勝之先生も強調します。

「ただ、時代の変遷を経て、本校が進学校として脱皮するうえでは、その面倒見の良さが、逆に少し弱い面になっていたのかもしれない」と大森先生は述懐します。

おそらくそれは、武道や茶道で言われる「守・破・離」のような、成長や習熟の過程で求められる課題とも共通するものなのでしょう。師（先生）から型（基礎基本）を学んだ後に、独創性やオリジナリティを発揮して、より高い境地に達したり、ユニークな成果を出せるようになるには、師の指導や型から離れて、自主的・自発的・主体的に学べるようになる必要があります。

「中学に入学して間もない頃には、親身に徹底的に面倒を見る必要があると思いますが、いつまでも教員が



同校の実習工場で作製された日本初の飛行機は、現寸復元機として日本工業大学の学内に展示されている。

丁寧に面倒を見過ぎては、生徒が主体的に学べるようになりません。やがては手を放して見守る姿勢が教員に求められると思います。大学受験でも良い成果を発揮できるのは、やはり自立した学習姿勢を身に付けた生徒ですよ」と大森先生。

そして同校は、工科大学からの伝統的な教育姿勢に加えて、進学校への脱皮を図るために高校工業科を廃止し、今年 7 月に東京都から「普通科専一校」として正式な認可を受けたことを節目に、新たなスタートを切ることになりました。

「本校は、東京工科大学として 113 年前に設立されて以来、3 度の大きな変遷を遂げて現在に至っています。

最初は、創立時は小石川でスタートした校舎を関東大震災で焼失し、1930（昭和 5）年に鉄筋コンクリートの校舎が神田に落成するまでの 23 年間。

次にその翌年に当時の実業学校令工業学校規定による 5 年制（甲種）の東京工業学校を設置してから、戦後の新学制により東工学園中学校を設置して、1948（昭和 23）年に目黒区駒場町の現校地に移転し、東京工業高等学校となる 1931（昭和 6）年～1949（昭和 24）年までの約 19 年間。

そして、この 1948（昭和 23）年から駒場での新たな歩みをスタートさせ、1967（昭和 42）年に日本工業大学を開学し、やがて 1990（平成 2）年に日本工業大学付属中学校、2008（平成 20）年に日本工業大学駒場中学校と改名して現在に至るまでの約 70 年の間にも、校舎の大規模リニューアルのための赤坂への校地一時移転や創立 110 周年など、様々な節目がありました」と大森先生は歴史を振り返ります。

「笑い話みたいですが、この京王井の頭線『駒場東大前駅』周辺には、「駒場」の地名が付く学校が、筑波大駒場や駒場東邦など 5 校もあるのですが、そのうち住所が「目黒区駒場」にあるのは本校だけなんです（笑）」と大塚先生は教えてくれました。

普通科専一校としての正式認可を節目に 工科学校～工業学校の枠組みを離れ、 本格的な進学校として次のステージへ！

そして同校は、この新たな節目に、いよいよ本格的な進学校として次のステージに向かいます。

来春 2021（令和 3）年からは、高校にこれまでの特進・理数特進・総合進学 の 3 コースに加えて、「文理未来コース」を新設。同時に高校工業科を廃止。創立から 113 年続いてきた工科学校～工業学校の枠組みを離れて、新たな歩みをスタートさせます。“新生・日駒（にちこま）”の誕生と表現しても良いでしょう。

すでに中高一貫コースでは、2008（平成 20）年に現校名に改称したときに中学を共学化し、普通科専一の進学校としての歩みを進めてきましたが、来春 2021（令和 3）年からは、創立以来最も大きな改革ともいえる、大学進学強化という目標を掲げています。

その新たな“新生・日駒”を象徴する教育運営方針が、“優しく勁い心を育てる”重層的三位一体の教育「日駒トリニティ」というものです。

同校の『学校案内』にも大きく紹介されている下の図では、日駒の「教育姿勢」、「教育力」、「教育実践」の 3 項が相互に支え合い、3 項それぞれがさらに各々 3 項に重層的に構成される“三位一体”の構造が「日駒トリニティ」として新たに位置づけられています。

「あえて古典的な、少し固い言葉を使っていますが、本校に伝統的に受け継がれてきたものに新たな取り組みを加えた、“新生・日駒”のこれからの教育のあり方を良く表していると思います」と大森先生は言います。

まず「日駒の教育姿勢」にある“意図的教育”や“美点凝視”という言葉は、聞きなれない言葉ではありますが、もうひとつの“選択と集中”と合わせて、生徒の良いところを見つけ、個性を伸ばし、確かな成長を促す関わり方をするという同校の先生方に受け継がれ



日駒オリジナル教材
「にちこま文学全集」

言語能力を高めつつ人生の幅を広げる「能動的読書体験」を促すオリジナルの「にちこま文学全集」。

てきた伝統的な教育姿勢を表しています。

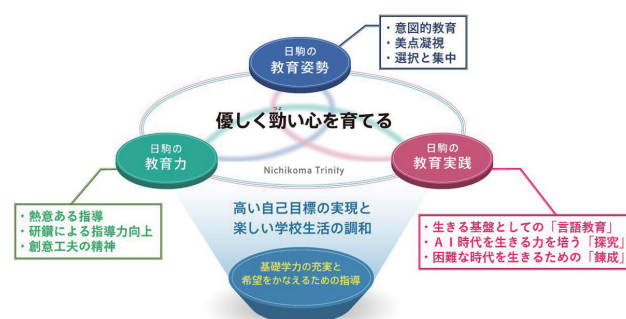
続いて「日駒の教育力」にある“熱意ある指導”は先ほどの大塚校長の言葉にもあった、教師陣の熱意を示したものです。“研鑽による指導力向上”と“創意工夫の精神”は、工科学校からの伝統に加え、時代に即した新たな力を育てるために、教師陣に必要な不可欠な教育技術と進取の取り組み、創造性を高め、それを具現化する教育を言葉にしたものです。

そして「日駒の教育実践（＝教育構想）」にある“生きる基盤としての『言語教育』”は、今後の社会でますます重要になるコミュニケーション力につながる情報収集（吸収）力や、その情報を鵜呑みにせず確かなものを選び取る批判的思考力、今後の協働・共生社会で大切になる対話力を育てるものです。次の“AI 時代を生きる力を培う「探究」”は、理数分野と人文社会分野どちらにも必要な、それぞれの探究力を身に付けていくためのものです。そして“困難な時代を生きる”ための「錬成」は、多感な中高生時代だからこそ大切な、様々な体験を成長に生かしていくプログラムです。

「これらの教育姿勢や考え方、教員のスタンスは、これまでの本校でもすでに実践されてきたことです。その良い意味での伝統も受け継ぎ、同時にこれからの学校を担う若い先生方に新たな形で生かしてもらうために、“意図的に”言葉と図の形にして表現したものが「日駒トリニティ」です」と大森先生は強調します。

「生きる基盤としての『言語教育』では、とりわけ本校では国語教育を大切に考えています。とくに本校の教員が編纂したオリジナルの『にちこま文学全集』は、成長期、思春期の生徒たちにとって、とても良い読本になっていると自負しています」と大塚先生。

言語能力を高めつつ人生の幅を広げる「Active Reading Program」とも呼ばれる、日駒の「能動的読書体験」は、こうした独自の工夫にも支えられています。



「日駒トリニティ」＝優しく勁い心を育てる重層的三位一体の教育

新たな学びの環境も着々と整備し、 教員の情熱(=パッション)をもって “人柄を育てる”教育実践を！

そして、普通科専一校として大学進学強化という改革目標掲げた“新生・日駒”では、従来の工学科の施設のあった地下1階のフロアにはトレーニングスタジオ、校舎に入ってすぐ正面に位置するフロアには図書館という、新たな学びの施設の設置工事が行われており、取材に訪れた10月2日は、ちょうど前日に地下1階トレーニングスタジオの工事が終わり、建築会社からの引き渡しを受けたばかりの日でした。ピカピカのフロアに、これから生徒たちが躍動する姿が完成予想図にも描かれており、まさに今後の日駒の躍動・躍進を予感させる印象を受けました。

1階の新図書館の工事はまだ途中でしたが、来年の完成が楽しみです。その後は校内見学に訪れた受験生と保護者は、まずこの図書館で生き生きと学びに取り組む在校生の姿を目にすることになるのでしょうか。

「校舎に入ると必ず目に入るこの図書館を、これからの日駒の新たな学びの象徴になるよう活用してもらいたいと思っています」と大塚先生は言います。

これまでの進学校化への歩みと様々な学園の変遷の時代に同校を支えてきた前々校長の大森和夫先生、前校長の吉田忠雄先生というお二人の先輩からバトンを受け、いよいよ普通科専一校としての本格的な改革へのスタートを託された第7代校長の大塚勝之先生は、人間的な温かさと優しさに加え、教員としての大きな情熱(=パッション)を感じさせるお人柄です。

「新しく入ってきた若い先生方には、常に熱を持って生徒に接する日駒のスタイルを理解してほしいと思っています。やはり教育は人が行うものであり、教員の人柄や熱意が生徒の心を動かすものですよね。そうい



完成は来年になるが、新生・日駒の新たな学びの象徴となる図書館。



すでに完成し今年10月から生徒が使い始める地下1階のトレーニングスタジオ。

う姿勢は、これからも本校では変わらないと思います」と大塚先生は強調します。

そういえば、最近の教育の世界では、アクティブラーニングの手法のひとつ「PBL(=プロジェクト・ベースド・ラーニング)」と同じアルファベットで表現される、「パッション・ベースド・ラーニング」という言葉も使われるようになっていきます。

その意味で、大塚先生の言う日駒の先生方の熱意、情熱とは、この「パッション・ベースド・ラーニング」に通じるものなのかもしれません。

そうした学校全体の教育姿勢が、最近は多くの保護者や受験生に好感を持たれるようになり、今春2020年入試では、中高一貫コースに初めて中学4クラス137名という多くの入学者を迎え入れ、さらに学内が活気づいているといえます。

同校の『学校案内』には、

◆**校訓**＝「誠実・明朗・勤勉」

◆**教育理念**＝「旺盛な探究心と共に優しく強い心を育み、未来社会に生きる力を身に付ける」、

◆**教育運営目標**＝「わたくし達、教職員は…1. すべての生徒が、瑞々しい好奇心と高い自己目標を持ち続けると共に、楽しい学校生活が送れるよう全力を尽くします。2. さまざまな生徒一人ひとりに寄り添い、受け止め、心のよりどころとなるよう熱意をもって取り組みます。3. 特色ある教育プログラムにより、確かな学力と多様な個性を育み、進路の夢実現のため、最後までサポートします。」と明記されています。

校訓と教育理念はどの学校でも書かれているのが普通ですが、教職員の先生方の取り組み姿勢までを謳っている学校は、私立でも珍しいように思えます。これも校訓に謳われているのと同様に、日駒という学校の「誠意」の表れなのでしょう。

「本校の教育の最大の願いは“人柄を育む”こと、これに尽きます」という大塚先生の言葉には、生徒への

愛情や期待とともに、同校の教職員の先生方への信頼が感じられます。

たとえば、日駒の学習プログラムの強化実践の柱となるのが、一日の記録と学習課題を組み合わせた同校独自の「ファイトノート」です。生徒がファイトノートに毎日取り組むことにより、家庭での学習習慣を定着させることができ、さらに保護者と連携を深めて子どもの小さな変化を見逃さないようにすることができるといいます。このファイトノートも、生徒と教員の親身な関わりから生まれる日駒の教育スタイルのひとつの象徴ということができるでしょう。

工学科の3年間のカリキュラムの課題として、ミニ SL の 1,000 点ものパーツをすべて自作したもののづくりの魂を受け継ぐ STEAM 教育へ！

こうして、工学校～工業学校の枠組みをいったん離れて、進学校として新たな教育プログラムと教育環境で次世代への歩みをスタートさせる“新生・日駒ですが、そこには脈々と受け継がれた伝統の”ものづくり教育”の貴重かつ希少な DNA も息づいています。

「かつて昭和 40 年代に日本工業大学の開学に尽力し、その後、11 年にわたって第 3 代校長を務めた窪田宗英先生の考えで、学内で作り上げるミニ SL（蒸気機関車）に必要な 1,000 点にも及ぶパーツ（部品）をすべて学内で制作するという課題を、工学科の 3 年間のカリキュラムに含めていた時代がありました」と大森先生は当時を振り返ります。

それだけのパーツを自作する経験を通して、生徒自身が技術と粘り強さを培うことに加え、学校全体に、“ものづくりの魂”を浸透させたようにも思えます。その時代から現在までに製作されたミニ SL



ミニ SL を前に、当時の生徒が自作したという 1,000 点に及ぶパーツに想いを馳せる校長の大塚先生



工作室にまだ数 10 台も保管されている歴代のミニ SL。この風景は壮観だ！



創作意欲をかきたてる「ものづくり教育」は、日駒の教育の根幹でもある。

が、いまま学内には何台も保管されている様子は壮観です。

そして、1987（昭和 62）年には、大学で「ミニ SL 国際フェスティバル」も開催されました。

かつて明治期や戦後の高度経済成長期の工業化時代に日本の第 2 次産業の発展を支えてきた工業高校の教育は大きな期待が寄せられましたが、やがて第 3 次産業（サービス業）中心の時代を迎え、高校進学率がほぼ 100%となり、高等教育（大学や大学院）への進学率も過半数となる時代への変遷のもとで、“工業高校の冠（校名）”が、生徒募集という観点で見れば、受験生にやや敬遠される時期がありました。

しかし、いままた時代が変わり、新たな価値や画期的な製品を生み出す“ものづくり教育”の重要性は、「STEM 教育」や、これに「A (art)」も加えた「STEAM 教育」という呼ばれ方で、世界的な教育の課題となってきました。国連グローバル・ゴールズとも呼ばれる「SDGs（持続可能な 17 の開発目標）」の環境保護や

エネルギー問題などの解決にも、新たな“ものづくりの力”は不可欠のものとなっています。

「高校の工業科は廃止されますが、そういう意味での“ものづくり教育”の価値や必要性が変わるわけではありませんし、本校の伝統ともいえる“ものづくり教育”

が生み育ててきた DNA は、進学校へと脱皮する今後でも大事に受け継いでいきます」と言う大森先生、大塚先生の言葉の裏には、実のところそれが「本校の誇る宝物」という考えがあるようにさえ感じられます。

私たちから見ると、同校の“ものづくり教育”の環境やクオリティは圧巻で、進学校へと生まれ変わる新生・日駒が、今後はその伝統の DNA を生かして、新たな時代に求められる「STEAM 教育」を実現してくれるのではないかという期待が高まります。

そしてもうひとつ、現在の日駒を活気づけているのは、2008（平成 20）年に共学化を果たしてから 12 年の間に、同校の教育を慕って入学してくれた女子の存在です。昼休みや放課後に屋上庭園や女子ラウンジに集って、昼食を食べたり談笑する女子の姿が、校内の雰囲気や一段と明るくしています。

「来年、図書館が完成すると、また新たな教育環境が整いますので、学校生活の居心地もいっそう好くなると思います。多くの女子に受験して入学してきてほしいですね」と大塚先生。

日駒の学校生活を象徴する個性的な文化のひとつに、式典で着用する同校独自のアカデミックガウンがあります。まるで欧米の名門高校の生徒の装いのような、このアカデミックガウンで参席する式典は、すでに同校の伝統として定着しているといえます。

草創期の名門工科学校の歴史を受け継ぎ、時代に合わせた進取の気風を併せ持つ新生・日駒の今後の進化に期待がかかる！

今回の大森先生と大塚先生へのインタビュー取材では、日本工大駒場の創立からの歴史を遡って貴重なお話を伺うことができました。

「一時期は工業高校の人気が高まり、生徒数が 3,000 名を超える時期がありました。しかしその後、工業高校の人気離れが顕在化してから、しばらく募集には苦労する時代もありましたが、いまは人気も上向いています。本校の創立時からの経緯を振り返って調べてみると、創立時の工科学校は、かなりの名門校だったようです」と大森先生が歴史を紐解いてくれました。

「1916（大正 5）年から本校の経営を継承し顧問に就任した大木遠吉という伯爵は、佐賀藩出身の維新の元勲・大木喬任の嫡男で、現在の文部科学省の基礎をつくった政治家でもありました。慶應義塾を設立した福沢諭吉や、同志社を設立した新島謙のような、教育界の先達の一人だったようです。

その跡を継いで顧問になった大木喜福という伯爵は、徳川第 15 代将軍・徳川慶喜の孫にあたる人で、後に



昼休みに女子専用のラウンジに集まり談笑する憩いのひと時。

1931（昭和 6）年から校長に就任して、戦後、新学制によって本校も新制の中学・高校となり、この駒場の地に移転するまで校長を務めました」

そう大森先生が話してくれた当時の同校の歩みには、錚々たる人物が関わり、工科学校～工業学校としての基礎を築いてくれたようです。

「そして、1969（昭和 44）年から校長を務め、その 2 年前の日本工業大学の開学に尽力した窪田宗英という先生は、『工業の学校は共通の物差し（現在という偏差値などの学校の序列）に当てはめられない』という考えから、工業学校としての施設の拡充を図り、現在につながる本校の基礎を築いた存在でした。当時の工業学校に求められた設備を 100% 備えた学校として、全国の第 1 号に認定されたと記録されています」と大森先生。

学校の序列を生む既成の物差しから脱却すべく独自のスタイルで私学としての個性を打ち出し、その時代の注目を集めた教育姿勢は、いま日本の教育と入試が変化の節目を迎えている状況のもとで、偏差値や知名度に縛られない新たな教育スタイルを打ち出す私学に期待や注目が集まっていることと何か共通するものを感じます。同時にこの 1～2 年は、カラーの色濃い私学に人気が集まる傾向があることも、同校の今後の人気上昇に反映していきそうです。

工科学校～高等工科学校としての歴史と伝統を 110 余年にわたって育み、いま、あえてその枠組みを脱して、進学校としての新たなステージに進もうとしている新生・日駒。この記事の冒頭で紹介した「日本初の飛行機の製作」も、長い歴史のなかで、時代に合わせて新しいことには積極的にチャレンジして取り入れてきた同校の進取の気風を物語るエピソードです。

新生・日駒の私学としての「不易（変わらないもの）と流行（変わるべきもの）」の具現化とその新たな成果に、今後いっそう注目していきたいと思います。